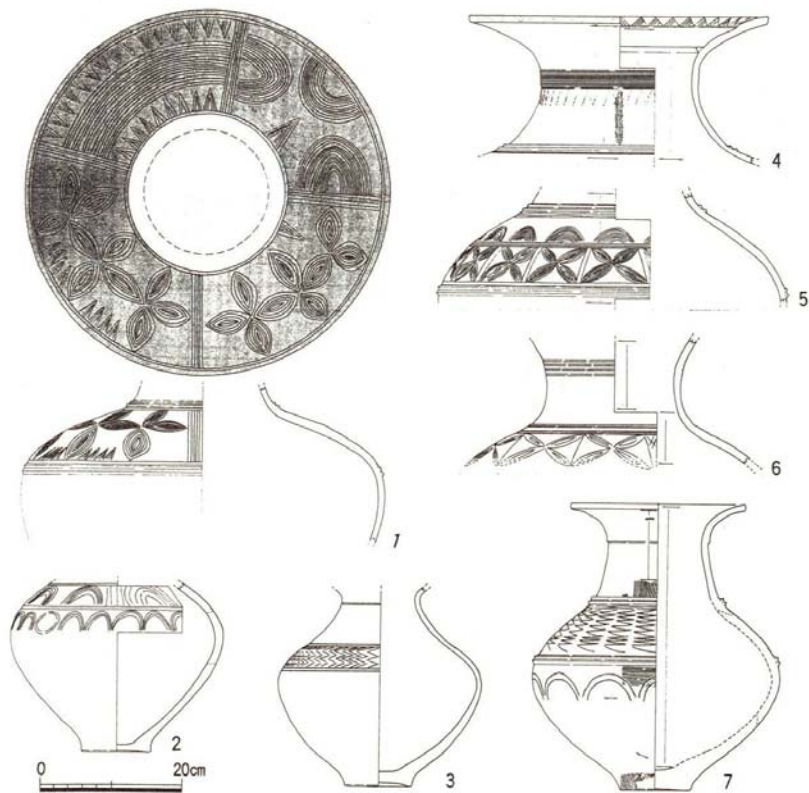


これ以外にも同様の遺物を副葬する埋葬施設が多数あり、これらが墳丘墓という集団墓を構成している。そしてこの集団墓が全体として一〇基を超える群を形成している。このことから、当遺跡は京都平野南部に中心勢力を持つ有力な集落または一族の墓地と想像される。副葬品にみられるこのような状況は、築上郡南部においても穴ヶ葉山遺跡で確認されている。穴ヶ葉山遺跡は終末期の集団墓地であるが、石蓋土壙墓を主体とした八三基の埋葬施設のうち、約四六（セクト）にのぼる三八基からなんらかの副葬品が出土している。これは、この集団墓地を営んだ集落自体が、ほかの集落に比べ優越していたことを示すものであろう。以上のように、京築地域では後期になると特定集団墓が各地に営まれるようになるが、特定個人墓についてはまだ明らかになっていない。

### 三 道具の変化

**土器の地域性** 日常生活に使用された最も身近な道具である土器は、その時々々の地域文化とその周辺地域との交流について、ありのままの姿を私たちにみせてくれる。

前期前葉では、北部九州で、広く板付Ⅰ式土器が出土している。中葉から後葉になると、京築地域ではだいに地域性が顕著になってくる。壺の文様に、それまでの羽状文に加えて綾杉文や円弧文・木葉文が施されるようになる（第53図参照）。また、施工工具として、ヘラ状工具以外にもアカガイなどの鋸歯状の縁辺部を持つ二枚貝が盛んに使用されるようになる。この二枚貝による施文は、山口県西部の響灘から北東九州の



第53図 前期後葉の土器文様

周防灘沿岸地域に共通してみられる手法であり、速賀川以西の北部九州とは別の文化圏を設定する一つの材料となっている。また、木葉文土器は、下稗田遺跡・竹並遺跡・中桑野遺跡・犀川町大熊遺跡などで発見されているが、木葉文は大坂府鬼塚遺跡・兵庫県田<sup>た</sup>能遺跡・山口県綾羅木郷遺跡<sup>のう</sup>など広く瀬戸内海沿岸部や近畿地方の壺に施される文様である。

中期になると、ごく一部で壺に文様を施すものが残るが、文様帯をつけない北部九州の広い文化圏のなかに包み込ま

れてしまう。特に、中葉では遠賀川以西の須玖式土器の文化圏の強い影響下に入る。

後期になると、土器は西日本の広い範囲で比較的画一化されてくる。当地域でも中葉には高坏が瀬戸内系になるほか、後葉以後壺や甕の底部が丸底化し始め、当地域の独自性はほとんどみられなくなる。

### 石器の地域性

石器の形態の変化や、生産地との関係、さらに鉄器への移行などの面に消費地としての当地域の性格がうかがわれる。

稲の穂摘み具である石庖丁は、葛川遺跡で平面形が三角形に近い古い形式のものが出土している。また、黒色粘板岩を素材として、背部を擦り切りして製作したものがみられる。前期後葉から中期にかけては細粒砂岩や粘板岩・頁岩を素材とした、外湾刃半月形の平面形のもものが主流となるが、杏仁形や直線刃半月形のものもみられる。当地域で使用される石庖丁の生産地は飯塚市立岩周辺だけでなく、北九州市西部地域にも想定される。後期では鉄鎌が普及するが、石庖丁は下稗田遺跡では住居跡七五軒から二三点で一軒当たり約〇・三点しかないのに対し、十双遺跡では三一軒で一七点あり一軒当たりでは〇・五五本所有していることになる。京築地域のなかでも小地域間または集落間で、鉄器への移行に若干の差異があったことが推測される。

太形蛤刃石斧は、前期中葉では全体的にやや小型であるが、後葉から中期前葉には全長二〇～二五センチメートルの大型で胴身部の厚いものが多くなる。また、この時期にはやや小型で断面形が隅丸方形をなすものなど形態の分化が進んでくる。期中中葉では分化した多様な形態が逆に淘汰されて、胴身部が厚く、断面形が楕円形のもものが主流となる。片刃石斧のうち、挟入柱状片刃石斧は前期には断面形が方形のもものが多く、蒲鋒型

のものは少ないが、中期になると蒲鉾型で厚手のものが多くなり断面台形のものもみられる。石斧は前期・中期段階では石器全体の約二割前後を占めるが、鉄斧の普及に伴い後期になると一割以下になる。なお、当地域で使用される太形蛤刃石斧のうち、六割程度が北九州市八幡西区の金剛山麓産のものと考えられ、福岡市今山産のものは五割程度にとどまる。

磨製石鏃は前期中葉には縦長の身部に方柱状の茎を持つものがみられるが、中期では無茎で身部の短い二等辺三角形をなすものが多い。中期後葉以降になると、石剣などとともに武器は鉄器化していくものと考えられ、出土例がごく少なくなる。

#### 第四節 北部九州の弥生時代の遺跡

弥生時代における北部九州は、水稲耕作の導入に始まり、銅鏡・銅剣などの青銅器の輸入などを通して、大陸文化を受け入れる窓口となっていた。また、時代を通じて先進地として重要な位置を占めており、古墳時代が始まるまで倭国の中心地の一つとなっていた。

##### 前期

初めて水稲耕作を行った集落は、北部九州では縄文時代晩期末にさかのぼる。福岡市板付遺跡では突帯文土器単純期の水田と集落が発見されている。御笠川の氾濫原に延びる舌状台地上に住居と貯蔵穴からなる集落と墓地が営まれ、水田は集落西側の氾濫原に広がる。弥生時代前期になると、